



ひとつのまちを目指して

浅草と東京スカイツリータウン®をつなぐ、
にぎわいの東西軸づくり

■東武鉄道と、すみだ

東武鉄道は、今年で創立123年目を迎えます。創立当初は久喜駅(北千住駅でしたが、現在では一都四県に渡る463.3kmの路線延長となっています。

東武鉄道と墨田区の歴史も長く、1902(明治35)年に吾妻橋駅(現とうきょうスカイツリー駅)と北千住駅の運行開始から118年となります。本稿では、東武鉄道と「すみだ」との関係の変遷を踏まえて、現在進めているまちづくりの取り組みを紹介いたします。

■流通の拠点からまちの玄関口へ

当時世界一の人口を誇る江戸のまちには、関東一円の河川・水路網とその水運が支えていました。東武鉄道はこの水運に沿って鉄道を計画し、北関東方面の旅客・貨物輸送を一手に担うこととなります。

その狙いは、北関東の豊富な物資を国内外に流通させるために

東京湾岸に運ぶことであり、越中島への延伸を目指しました。しかし急激な市街化により延伸が困難となり、現在の亀戸線から総武鉄道(現



(上)浅草駅(現とうきょうスカイツリー駅)に設けられたドック (下)震災復旧後の浅草駅(同)
出典:東武鉄道百年史(1998年東武鉄道社史編纂室編集 東武鉄道株式会社) ※東武鉄道の詳しい歴史は東向島駅の東武博物館へどうぞ!

JR総武線)に乗り入れ、隅田川に接する荷上場のある両国橋駅を終着駅としました。

一方、両国橋乗り入れに伴い廃止されていた吾妻橋駅は、総武鉄道の国有化により乗入れが廃止となると、舟運と鉄道の結節拠点として再整備されました。この頃には東京随一の繁華街として浅草が隆興していたため、浅草と郊外を結ぶ玄関口として「浅草駅」を名乗りました。なお、実際の浅草とは市電で結ばれていました。

晴れてターミナル駅となった浅草駅でしたが、当時、東京に乗り入れる民間の旅客鉄道会社の悲願は、都心(新橋・東京駅)への接続でした。1923(大正12)年、関東大震災が発生し、当社線も甚大な被害を受けましたが、早期に復旧させるとともに東京市の復興計画に協力しました。その過程で花川戸へ

の延伸が決定し、

1931(昭和6)

年に浅草雷門駅(現浅草駅)が開業しました。ようやく

念願の隅田川を渡り、新名所となった駅ビルと併せて、名

実ともに浅草の玄関機能を担うこと

となりました。一方の浅草駅は業平橋駅と名を変えつつ、本社機能及び貨物流通の拠点として引き続き役割を果たしていくこととなります。

■地域の活性化を担う拠点づくり

創業以来一貫して貨物を扱ってきた当社でしたが、戦後のトラック輸送の発達や旅客輸送の過密化などによって、鉄道貨物輸送は衰退の一途を辿ります。

ついに、1993(平成5)年に貨物取扱いを廃止し、業平橋貨物駅もその役割を終えました。しかし間をあけず、墨田区・地元関係者から新タワー誘致の協力要請を受け、2006(平成18)年、業平橋貨物駅跡を建設地として決定しました。

こうして開業を迎えた東京スカイツリータウン®ですが、浅草と同じ年間3,000万人の観光客を呼び込み、世界に知れ渡る観光スポットとして定着しました。昭和初期の浅草雷門駅の駅ビルと同様に、鉄道用地を使った地域活性化に資する拠点開発の役割を果たしましたが、周囲のまちとの賑わいの共有という点では、まだまだ改善の余



(上)北十間川と東京ミズマチ®
(下)すみだリバーウォーク CGパース出典:2019年 東武鉄道株式会社 生活サービス創造本部 まちづくり推進統括部

■地域とともにひとつのまちづくりへ

これからの当社は、鉄道と地域が一体となってまちの魅力や価値を高めていく施策に力を入れていきます。1.5kmしか離れていない浅草と東京スカイツリータウン®一帯をひとつのまちとして捉え、様々な回遊によって賑わいを周囲に広げ、エリア全体で東京最強の観光地を目指すまちづくりです。

墨田区や地域の皆様と進めてきた北十間川・隅田公園観光回遊路整備事業が進み、当社は、高架下に水辺や公園と一体的な賑わい施設「東京ミズマチ®」を整備します。更に、東西軸の核であり、隅田川を楽しく歩いて渡れる歩道橋「すみだリバーウォーク」を整備し、新しい人の流れを創ります。ここからどんどん、まちに回遊が広がるよう、地域の皆様と様々な取組を進めたいと考えています。でも…もし歩くのが疲れたら、いつでも電車をご利用ください!

(東武鉄道株式会社 生活サービス創造本部 まちづくり推進統括部)
池田陽祐・佐藤拓

いよいよ始動！ 大学のあるまちづくり



(上)千葉大学デザイン・建築スクール(仮称)パース図
 ※出展:旧すみだ中小企業センター改修基本設計
 (下)IU外観写真 ※出典:情報経営イノベーション専門職大学

いよいよ今年4月、文花地域に区内初となる大学「情報経営イノベーション専門職大学(愛称:iU)」が開学し、来年4月には「千葉大学デザイン・建築スクール(仮称)」が開設します。

地域の特徴

文花地域の名前の由来は、文教施設が多くあることから「文」の字と、明治通りを挟んだ東側にある吾婦神社に祀られている、主祭神弟橘姫から「花」の字を取り、「文花」と名付けられたと言われています。

現在、この地域は、町工場と住宅が混在しており、職住が近接した住宅街と地域コミュニティの中心となる商店街もあり、下町情緒あふれる街並みが広がっています。また、学校や病院のほか、あずま百樹園などの公園も位置する地域環境となっています。

大学誘致までの経緯

墨田区が大学誘致の方針を決定したのは平成20年まで遡ります。文花一丁目の旧曳舟中学校・旧西吾婦小学校の跡地を「大学等の教育機関を誘致する」方針とし、その後、大学の公募などを実施しましたが、何年もの間、誘致実現には至りませんでした。

しかし、平成29年、大学誘致が大きく前進することとなります。同年3月、国立大学法人千葉大学との包括的連携協定の締結、そして12月の、学校法人電子学園との包括的連携協定の締結が、「大学のあるまち すみだ」の実現に向けた第一歩となったのです。

千葉大学について

千葉大学の工学部は元々、東京高等工芸を母体としており、工学と美術の境界領域である工業デザインを対象とした日本初のデザイン学校として、大正11(1922)年に開学されました。開学から100年を迎え、現在都内にキャンパスがない千葉大学が、東京都内で、日本初となるデザイン・建築スクールを開設したいという意向と、墨田区が進めている大学誘致が結びつき、包括的連携協定の締結に至りました。スクールの拠点となる場所は、文花一丁目にある旧すみだ中小企業センターを予定しており、令和3年4月の開設

に向け、現在は改修工事が進められています。

情報経営イノベーション専門職大学について

そして、これに先立ち、墨田区にもう一つ大学が開学します。

千葉大学との協定から9か月後、墨田区は学校法人電子学園と包括的連携協定を締結しました。そして今年4月、旧曳舟中学校跡地に、情報経営イノベーション専門職大学が開学します。

専門職大学とは、平成29年5月に学校教育法の改正に伴い創設された、新たな分野の大学です。幅広い教養や学術研究を中心とする従来の大学とは異なり、特定の職業のプロフェッショナルになるために必要な知識・理論、そして実践的なスキルの両方を身に付けられるのが特徴です。

学校法人電子学園は、AI、CG、ゲーム、アニメ等の教育を実施する日本電子専門学校を運営しており、ICT分野における強みを生かして、都内に専門職大学の設立を目指している中で、墨田区が進めている大学誘致と結びつくこととなりました。iUは、ICT・ビジネス・英語の三分野を専門に学ぶことができる専門職大学で、「ICTを手段として、グローバル社会でイノベーションを起こす人材を輩出すること」を目的

とされています。

4年間のカリキュラムでは、企業の実務経験を有する教員等からビジネスに必要なノウハウを学び、5か月に及ぶインターンシップを経験させるなど、実践的な職業教育を行うこととしています。

大学のあるまちづくりについて

墨田区では、こうした特色の異なる2つの大学の開学・開設により、大学が持つ技術や知識がすみだに集積し、多様な連携・交流が生まれ、活気のある「大学のあるまちすみだ」となることを目指しています。地域の方が気軽に訪れ、大学の食堂や施設の利用ができたり、大学の活動に触れることができる空間づくりなど、地域に開かれたキャンパスとなるよう、大学と連携しながら、まちづくりを進めていきます。

(行政経営担当)

